

千葉が鎌倉で活躍した話
二階堂の谷から滑川へ

1192年に源頼朝が征夷大將軍となり、鎌倉幕府がスタートした。政庁は鎌倉の大蔵（現在の雪の下三丁目、清泉小学校の辺り）に構えられた。

1199年（建久10年）、源頼朝の死去後幕府内では御家人同士の争いが多発していた。

1203年（建仁3年）、二代將軍源頼家が幽閉された後に暗殺され、北条時政・義時親子によって源実朝を將軍の座に据えての北条執権政治が固められつつあった。

1213年（建暦3年）、千葉成胤（ちばなりたね：千葉氏五代当主）が鎌倉甘縄（現在の鎌倉市長谷）の屋敷で一人の怪しい僧侶を捕え二代執権北条義時に差し出した。僧侶は信濃国の青栗七郎の弟で、阿静房安念と言ひ、信濃国の泉小次郎親衡の使者として千葉成胤を訪ねてきた。

泉小次郎親衡が、源頼家の三男栄実（千寿丸）を担いで將軍の座に据え執権北条義時を倒さんと、密かに同志を集めており成胤の力を得るべく訪れたということであった。

しかし成胤の幕府への忠誠度は高く、僧安念は捕えられて幕府に突き出されてしまった。

安念の自白によりこの陰謀は発覚してしまい、これに端を発して和田合戦（和田義盛による幕府転覆計画）が始まる。

千葉成胤は、この一連の出来事への功績を高く評価され、北条執権の強い信を獲たと言われている。

この謀反の一味200人の内の一人として渋川刑部六郎兼守という御家人が捕えられた。

処刑を待つ身となった兼守は、自らの思いを歌った和歌十首を荏柄天神社（えがらてんじんしゃ）に奉納した。歌は、天神社に参籠していた御家人工藤十郎祐高の手により幕府に差し出された。

翌朝これを知った歌道に明るい源実朝は、歌の出来栄えに痛く感動し、罪を赦して放免にした。

兼守は神に感謝し、荏柄天神社の参道に橋を架けた。

という逸話が鎌倉市二階堂に残されており、二階堂川が滑川に合する地点の二階堂川側に架けられたこの橋には「歌の橋」と名が付いており、鎌倉十橋（かまくらじっきょう）のひとつに数えられている。

（鎌倉市観光協会のwebに掲載されている情報）

鎌倉十橋	歌の橋	うたのはし	十王堂橋	じゅうおうどうばし
	夷堂橋	えびすどうばし	筋替橋	すじかえばし
	勝ノ橋	かつのはし	針磨橋	はりすりばし
	裁許橋	さいきよばし	琵琶橋	びわばし
	逆川橋	さかさがわばし	乱橋	みだればし

荏柄天神社はその名の如く、学問の神さま菅原道真を祀った神社で、太宰府天満宮・北野天満宮とともに日本三天満宮と言われている。

1104年（長治元年）のある日、晴天の空がにわかにかき曇り雷雨と共に束帯姿の天神画像が現われた。祟りを恐れた里の民が社を建てて祀ったのが始まりと言われている。

1180年（治承4年）鎌倉に拠点を構えることにした源頼朝が、鬼門にあたる方角にあるこの社を珍重し、さらに手を入れて社殿を造営した。

余談になるが、政庁の位置は実朝の死後の北条執権政治の時代に入り1225年（嘉禄元年）に宇都宮辻子（うつのみやずし・現在の小町二丁目）に移され、1236年に若宮大路（現在の雪の下一丁目）に

移されている。荏柄天神社からの距離が遠くなるにつれて鎌倉幕府が衰退していったようにも見える。まさに「鬼門の祟り」のようで興味深い。

ついでに、「荏柄」という地名も気になったので調べてみた。大昔は「荏草（えがや）」という地名だったが、これが転じて「荏柄（えがら）」となったらしい。

ここまで史実が読み取れると、兼守が奉納した十首の歌を知りたくなるのだが、実はどこにも残されていないし、兼守が架けた橋に「歌の橋」と名が付いたという記述も見あたらないらしい。

政治ばかりでなく、歌の道も含む源実朝の行状を残す資料を紐解いたり、渋川六郎兼守という人の足取りを調べたりした人が沢山いたようだが、発見に至ってはいない。

幕府転覆を謀る陰謀の中に居た渋川六郎兼守が、捕縛された途端に十首の和歌をしたためて、「幕府の鬼門守護神である神社に奉納する」のは不自然な感じがしないでもない。渋川六郎兼守はここで寝返りを打ったのか、それとも無実の罪だったのか、など気になることがいくつ湧き出てくる。

自らの首を狙って来た刺客かもしれない男の和歌十首を目にしただけで無罪放免してしまう源実朝の行動も理解しがたい。実朝は歌人としては名を成したが、政治家としては無力と見る人もいたらしいので、さもありなんという感じにもなる。

時の執権北条義時が実朝の「無罪放免」の判断を許したことから考えると、実は渋川六郎兼守は無実だったのかもしれない。

細かな事実があまりきちんと残されていないことから、鎌倉幕府によって都合な史実は消されたという見方もできるし、鎌倉幕府を否定する次の世の為政者により抹消されたとも考えられる。

「歴史は勝者が都合の良いように書き残すことが出来る」ので何とも言いようがない。

鎌倉は、江戸時代には歴史を探訪できる観光地になっていたらしいので、後の世で、美談を探し出して観光を目的に作り上げたものか、というような疑念さえ出てくる。

奉納された十首の歌が不明にも関わらず、出来事の伝承だけが先行して「名所」として残されているのは何となくすっきりしない。

荏柄天神社境内の大銀杏は樹齢 900 年、神社の歴史ばかりか鎌倉の歴史の真実をも熟知して、それを糧に生き続けているのに違いない。

以上

<Appendix>

一年ほど前のこと、奇縁で知り合いになった方のお庭を見せていただくことになった。

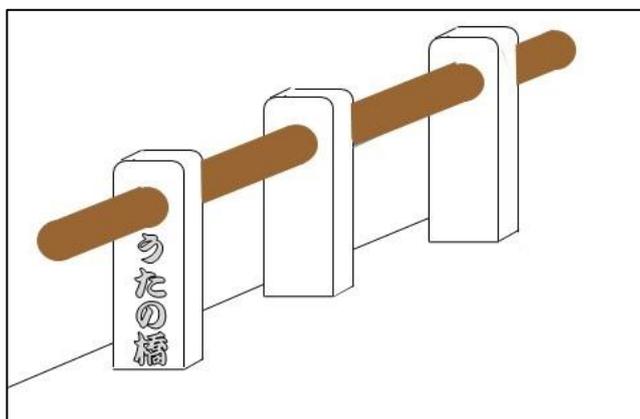
庭石がいくつか配されている、手の込んだお庭だった。

庭石の中のひとつが、奇妙な形をしているので記憶に残った。

腰の高さほどで、頭の丸い石の頭頂部には丸い穴（内径 20cm 弱）がくり抜かれていて、その下に太い大きな文字が刻まれていた。文字を読んでみたら「うたの橋」と読み取ることができた。（左画像）



おそらく、丸太の棒を差し込んで手すりにした橋標ではないかと感じたが、



「うたの橋」という言葉だけが鮮やかに記憶に残り、調べてみたくなった。元はこんな具合になっていたのかもしれない。